

私の保育

―戸惑いと失敗のなかで―



小林 ちう

今日から新学期―子どもたちの笑い声、歩き方、目の輝き一つ一つに、年長組になったという自信と喜びが満ちあふれている。

「年長組」ということが、こんなにも子どもたちの心はずませ、心にはりを与え、寛容にすることが、年長児を初めて受け持つ私にとって、驚きであり、発見である。と同時に、子どもたちのこのエネルギーが、これからどんな方向に動いていくのか不安である―こんな思いでスタートして三ヵ月たった今、日誌を読み返してみると、保育の根本的考え方、子どもたちの見方、かわり方で、子どもたちの成長に追いつけず、戸惑いや失敗の多い自分を発見し、あせりの気持ちを感じる。

特に、Yたち男児グループの遊び方、グループ内の関係を通し、保育者として、それをどう受けとめ、どんな立場に立ったらよいか経験三年目の私に大きな問題として投げかけられてきたように思う。

「おい、仲間あつまれー!!」 Yの一声で十人の男児が一団となって、庭へとび出して行く。

Yたちは、年少二期の終りごろから固まってきたグループで、「Yちゃんカッコいい」「Yちゃんライダーキックうまい」「Yちゃんやさしい」ということで、さまざま遊びをする子どもたちが、Yをリーダーとして集まっていた。

年少のころ、その遊びは、土手をころげまわってのライ

ダーごっこが主であり、お弁当になると、スモックやズボン、ある時は、顔までも泥だらけにして保育室にもどってきた。その時の彼らの表情には、遊びきったという満足感があふれており、私も、幼稚園という時間と空間をもった世界を、自分たちで生活できるようになってきたYたちを頼もしく思ってみていた。

それが年長になると、Yたちの遊びの興味と関心は、私の思いもつかない方向に発展し、その扱いと助言に戸惑うことしばしばとなった。

Yたちは、園庭のブランコや鉄棒などの遊具に変わって、幼稚園と隣接した短大講堂の石段、園舎裏の田んぼで遊ぶことが多くなった。またある時は、短大校舎内、園外、用水路にまで活動の場を広げていった。

そうなるとYたちは、「迷惑」「危険」ということで、彼らにとつてうれしくないことをほとんど毎日、日に何度か私から言われ、遊びを中断しなければならぬことになった。たとえば、短大のピカピカにみがかれた長い廊下を走りまわったり、学生用掲示板にライダーの絵をかいていると、「ここは、お姉さんたちのお勉強するところよ。ご迷惑になるから幼稚園で遊びましょう」と言われ、グループメン

バーのNが初めて見る珍しい「かねちよろ」(かなへび)を幼稚園に持ってきたので、Nの案内で通園路途中の竹やぶに探しに出かけ、見つからずがっかりして帰って来ると、「幼稚園に来たら『さよなら』するまでご門の外に出ない

お約束覚えてる？」と聞かれる。また、講堂横の用水路で、洋服がぬれないようにくふうして、くつ下もズボンもパンツもぬぎ捨てて虫を探していると、「大きくなったから大丈夫と思っても、ころんでおぼれてしまうこともあるのよ。

それにパンツをぬぐのは、お風呂とお便所だけよ」などと言われてしまう。そこで遊戯室のマイクのスイッチを入れ、みんなでライダーの歌を歌っていると、「マイクは、お誕生会の時だけ使いましょう」と言われる。

このようなあと味の悪いYたちとの関係をプラスに変えたいと思い、遊びに入っていくとすると、Hに「先生むこうへ行つてよ。ぼくたち遊んでるんだから」と言われてしまう。

Yたちと私と共通な気持ちをもつにはどうしたらよいのだろう。

Yたちの興味や関心、ダイナミックになってきた遊びを、どう受けとめ、どう生かしていったらよいのだろう。

これらの問題を考え、解決の答も得られないでいたある日、こんな事件が起きた。

短大事務局から「学生用ロッカーのかぎの紛失が相次いでいる。どうも幼稚園の子どものらしい」という連絡がきた。

そこでYたちがマークされた。なんでも話しそうなメンバーのDに、「Dちゃん、かぎのこと知ってる？」と聞いてみる。「うん知ってるよ。Yちゃんたち持ってきたの」

「Yはどうして何度話してもわからないのだろう。私の態度が甘すぎたのだろうか」こんなことを思いながらYたちを集めて聞いてみる。

「かぎのこと知ってる？」Yに目をあわせる。

「知ってる……」他の子どもたちからも次々と同じ答が返ってくる。

「前に、大学はお姉さんたちのお勉強するところだから入らないお約束したでしょ。お約束忘れちゃった？」

「覚えていたけど、かぎとる時忘れちゃった」Yの答である。

「Aちゃんは？」

「だってYちゃんとれとれって言ったんだもの」

「そうだよ、そうだよ。とらなくちゃYちゃん怒るん

だよ」

Yは、ひとり孤立し、指をくわえたまま黙っている。

「じゃあみんなは、ご自分がいやだと思っても、Yちゃんが『やれ』って言えば何でもやるの？『赤いスカートはいて幼稚園に來い』って言えば？」

「やだよ、やだよ」

「じゃあ『かぎとれ!!』って言われた時、どうしたらいいか考えてみましょう。Aちゃん『かぎとれ!!』っていう人よ。Tちゃんどうしたらいいかやってみましょう」

「かぎとれ!!」

「やだよ、おまえとれ!!」

「おまえとれ!!」

「おまえとれ!!」

AとTは、笑いながら押し問答となる。

「Tちゃん、Aちゃんはかぎとることがいけないことだって知らないみたいよ。どうしたらいいかしら」

見ていた子ども側から、「教えてやればいい」という声がある。

「……いけないんだよ」Tは、小さな声でポツンとつぶやく。

「そうね、いけないんだって教えてあげるとはむずかしいわね」

「うん」

「むずかしいけど、これからがんばれるかしら？」

「がんばれる」「がんばれる」という答が返ってくる。

「かぎはどこにあるの？」

「草の中に隠してある……」

「そうだよ。ぼくたちの秘密の基地なんだよ」

「ぼく、5の3であくかぎもってるんだよ」

「かぎ」「隠す」「秘密」「基地」「数字」——子どもたちの興味の対象が浮きぼりにされる。

かごの中にかにも子どもたちの興味をひきそうな円柱型の十三個のかぎが並べられた。そのかごを持って、事務局まで「おわび」に行く。

幼稚園と違った事務局のふん囲気、課長さんのむずかしい話は、子どもたちをシュンとさせた。

そして、かごを返し、中のかぎを一つずつ課長さんに手わたしながら「かぎとってごめんさい」「メイワクをおかけてどうもすみません」と、自分たちの考えたしかたのことば、神妙な顔つきであやまっていく子どもたちの姿に、

私もなんだか胸がいっぱいになる。

「約束を守る」「迷惑になることはしない」という点は、保育者としてゆずれないにしても、わくをとび出していく子どもたちの力を、どんな目で見ていったらよいのだろうか。子どもたちの興味や関心をプラスの方向に生かすということは、具体的にどうしたらよいのだろうか。

いったい「それぞれが遊んでいる」年長児の遊びの中で、保育者はどんな立場に立つたらよいのだろうか。

相変わらずの戸惑いと、試行錯誤を繰返す私である。

ある日、ライダーごっこを終えたYたちが園庭で水遊びを始めた。Yがホースを持って水をまくと、他の子どもたちは逃げまわる。そのうちに「川」ができてくると、もはや、Yをリーダーとしたグループ遊びの姿はくずれ、Hはシャベルを持ってきて、川を深くしようと掘り始める。いつもYのいうままに動いていて主体性に欠けると思っていたNも、TやKたちと堤防作りに一生懸命である。Jは、「いいものあったぞ！」と叫びながら、長いホースを砂場までのばし、AやBと砂のトンネルに水を通していている。DとCは、ホースの奪いあいである。そしてYは、ホースの

水を高くあげたり、水で地面に穴が掘れる発見をひとり楽しんでいて、他の子どもたちを命令することも指示することもしない。

ひとりひとりの子どもがグループメンバーであることを離れ、得意の遊びを続けていく姿を見てみると、今まで私は、Yたちに対して非常に狭い見方をしていたことに気づきハッとする。

グループが固定したと思われたところから、「今日Yたちグループは、こんな遊びをしていた」とか、「リーダーごっこばかりでなく遊びの質を変えたい」というように、グループ全体の動きにのみ目をやり、個々の子どもたちの姿を見落としていた。よく見ると、子どもたちの遊びはグループを離れることもある。こんな時の個々の子どもの成長の姿を鋭く発見しよう。

また、Yは、すべての遊びにリーダーシップをとれるような絶対的なリーダーでないのに、過重な期待と責任を負わせようとしていた。

グループというわくをはずし、もう一度個々の子どもの遊びにかかわっていくことから始めよう。

私の性急なグループというものに対するとらえ方を反省

するよい機会であった。

「先生は大変ですなえー。Yちゃんたち、いたずら坊主だから——花つみをしながら何げなく言ったある女兒のことは、私の心の中、保育の姿勢を見通されたよう、ドキッとする。」

子どもたちを暖かく包みこめる心の広さと柔軟性、安定した気持ち、私に一番必要のことと思う。

あせらず、子どもの成長を信じ「見て待つ」という姿勢を忘れないようにしよう。

もうすぐ「山の合宿」——山の自然の中でどんな遊びが展開されるだろうか。

この機会に、ひとりひとりの子どもをよく見つめ、新たな面を発見したい。

(長野県立短大附属幼稚園)